

本日の聖日礼拝説教につきまして、説教者の菊地順先生より原稿をご提供いただきましたので合わせて掲載させていただきます。

2021年2月21日聖学院教会聖日礼拝説教

「静かな信仰」  
イザヤ書 30：15－17

菊地 順

今日の聖書箇所には、「お前たちは、立ち帰って静かにしているならば救われる。安らかに信頼していることにこそ力がある」と記されています。口語訳聖書では、「あなたがたは立ち返って、落ち着いているならば救われ、穏やかにして信頼しているならば力を得る」と訳されています。この聖書箇所は、短い文章ですが、私の好きな聖書箇所の一つで、時々思い起こしては、読み返しています。ただ、新共同訳聖書では、「お前たちは」という呼びかけになっていて、どうしても馴染めません。新共同訳聖書には、やたらと「お前たちは」という言葉が出てきます。神と人間との違いを強調するためなのでしょうが、口語訳聖書の「あなたがたは」という呼びかけに慣れていまして、非常に違和感を覚えます。私にとって、新共同訳聖書が馴染めない一番の理由が、ここにあります。そのため、普段は、相変わらず口語訳聖書を読んでいます。2018年に出された聖書協会共同訳ではこの点が大いに改善され、非常に親しみを覚えています。今日の聖書箇所も、こう訳されています。「立ち帰って落ち着いていれば救われる。静かにして信頼していることにこそ／あなたがたの力がある」。そこで、今日は、この箇所だけは、この新しい聖書協会共同訳を用いながら、お話をしたいと思います。

ところで、今日の聖書箇所は、イスラエルが窮地に立たされた時代を背景としています。イスラエル王国は、第二代のダビデ王とその息子ソロモン王の時に最盛期を迎えましたが、紀元前 922 年のソロモン王の死後、イスラエル王国は南北に分裂してしまいます。そして、北王国のイスラエルは、紀元前 722 年にアッシリア帝国によって滅ぼされました。そして、そのアッシリア帝国の脅威が、その後南王国のユダにも及んでいきますが、イザヤは、この南王国で活躍した預言者です。イザヤ書の冒頭には、「アモツの子イザヤが、ユダとエルサレムについて見た幻。これはユダの王、ウジヤ、ヨタム、アハズ、ヒゼキヤの治世のことである」と記されています。そして、その 4 人の王の最後に記されているヒゼキヤ王の時の話が、今日の聖書箇所の背景となっています。このヒゼキヤ王のとき、南王国は、アッシリア帝国の脅威に晒されていました。そして、紀元前 701 年には、首都エルサレムがアッシリア帝国によって包囲される

という事件が起きます。その具体的な話は 36 章以下に記されていますが、この時、当然ながら、王も人々も大変動揺したのです。

このとき、ヒゼキヤ王は、その窮地を打破するため、一つの方策を打ち出しました。それは、エジプトに支援を求めることでした。神により頼むのではなく、隣接する大国のエジプトに助けを求めたのです。しかし、それは全く当てにならない、空しい試みでありました。そのため、それに対し、預言者イザヤは厳しく叱責したのです。イザヤは、1 節以下で、こう語っています。「災いだ、背く子らは、と主は言われる。彼らは、謀（はかりごと）を立てるが、わたしによるのではない。盟約の杯を交わすが、わたしの霊によるのではない。こうして、罪に罪を重ねている。彼らはわたしの託宣を求めず、エジプトに下って行き、ファラオの砦に難を避け、エジプトの陰に身を寄せる。しかし、ファラオの砦はお前たちの恥となり、エジプトの陰に身を寄せることは辱めとなる」。イザヤは、神に信頼することを忘れ、エジプトの助けを求めようとしたヒゼキヤとその民に対し、その愚かなることを語るのです。そして、「まことに、彼らは反逆の民であり、偽りの子ら、主の教えを聞こうとしない子らだ」（9 節）と叱責したのです。

また、このとき、動揺したイスラエルの民は、「馬に乗って逃げよう」、「速い馬に乗ろう」といって右往左往しました。イザヤは、それを見て、「一人の威嚇によって、千人はもろともに逃れ、五人の威嚇によって、お前たちは逃れる。残る者があっても、山頂の旗竿のように、丘の上の旗のようになる」と語っています。

そうした混乱と動揺がはびこった時に、イザヤは、初めのあの言葉を語ったのです。イザヤは、「立ち帰って落ち着いていれば救われる。静かにして信頼していることにこそ／あなたがたの力がある」と語ったのです。何よりも大切なことは、神に立ち返ることだと語ったのです。そして、落ち着いていれば救われる、静かに神に信頼しているならば、力が与えられると語ったのです。それは、イスラエルを本当に救うのは、エジプトの援軍でもなければ政治的策略でもなく、それは歴史を支配する神ご自身であったからなのです。そして、その救いの神について、イザヤは、18 節以下で、次のように力強く語っています。「それゆえ、主は恵みを与えようとして、あなたたちを待ち、それゆえ、主は憐れみを与えようとして立ち上がられる。まことに、主は正義の神。なんと幸いなことか、すべて主を待ち望む人は」。イザヤは、あくまでも、正義の神にこそ信頼し、落ち着いて静かにしているならば、力を与えられると語ったのです。そして、その力において生きよと語ったのです。ここに、預言者イザヤのゆるぎない神への信頼と、その信仰を見ることができるようになります。

ところで、初めにも触れましたように、このイザヤの言葉は、わたしの好きな聖書箇所の一つですが、この聖書箇所を読むたびに思い起こす一つのことがあります。それは、アメリカの「公民権運動の母」とも呼ばれたローザ・パー

クス夫人の信仰のことです。話はだいぶ変わりますが、1950年代から60年代にかけて、アメリカでは公民権運動と呼ばれる黒人の地位向上を求める運動がマーティン・ルーサー・キング牧師たちを中心として展開されましたが、その運動のきっかけを作ったのが、このローザ・パークスという夫人です。昨年の暮れ、森田美千代姉妹が、『マーティン・ルーサー・キング・ジュニア』という本を出版されましたが、その中にも詳しく取り上げられている女性です。

ローザ・パークスさんが、なぜ「公民権運動の母」と呼ばれるようになったかと言いますと、それは、パークスさんが、一人の白人乗客にバスの席を譲るのを拒んだからです。今から65年前の1955年12月1日にその事件は起こりました。当時、アメリカ合衆国の、特に南部では、人種隔離政策が堂々とまかり通っていました。「分離すれども平等」という建前の中で、公共施設を中心として、生活領域が白人用と黒人用に分けられていたのです。そして、公共機関の市営バスもその例外ではありませんでした。事件が起こったのは、アラバマ州の州都であるモンゴメリーという町でしたが、この町の市営バスも、真ん前から前が白人用、後ろが黒人用と分かれていました。そして、白人用の席が満杯になると、その後ろに座っている黒人たちは、白人に席を譲らなければならなかったのです。ローザ・パークスさんがバスに乗ったときは、まだ席が空いていました。そこでパークスさんは黒人用の席の一番前の席に座ったのです。しかし、2つ3つとバス停を進むにつれ、乗客が増え、白人用の席が満杯になり、人があふれました。そこで運転手は、パークスさんたちに、立っていた白人に席を譲るよう命令したのです。それは、当時の市の条例でそう決められていたからです。しかし、そのとき、パークスさんは席を立つことを拒否します。彼女は、静かに、しかしきっぱりと、「ノー」と言ったのです。そこで運転手は市の条例に反したということで警察に通報し、パークスさんは逮捕されることになったのです。

このパークスさんの逮捕をきっかけにして、モンゴメリーの黒人の人たちは、バスに乗るのを止める、バス・ボイコットを計画します。そして、その計画を推進するためにモンゴメリー改良協会という組織を作りますが、その議長に選ばれたのが、当時また若干26歳であったマーティン・ルーサー・キング牧師でありました。その後、このバス・ボイコットは1年あまり続きましたが、連邦最高裁判所が公共機関での人種隔離を憲法違反としたことで決着がつき、黒人の人たちの要求が認められ、この戦いに勝利を収めたのです。そして、その後、この勝利はいたるところにあった人種隔離の壁を打ち破る戦いとなり、公民権運動として展開されることになります。そして、1964年と65年に公民権法が成立し、黒人の人たちにも平等の市民権が与えられることになったのです。

しかし、こうした大きな変革をもたらすことになったのは、元をたどれば、ローザ・パークスさんが発した「ノー」という一言にありました。まさに、この一言が、歴史を変えたと言っても過言ではありません。しかし、この「ノー」

という一言が発せられるまでには、多くの時間が必要とされたのです。そこには、多くの黒人の人たちの苦しみと戦いがありました。そして、それに加えて、パークスさん自身の勇気が必要とされました。ただ、パークスさんは、大変控えめで、物静かな女性でした。しかし、そうした女性が「ノー」と言えた背景には、確固とした信念と同時に、固い信仰があったと言えます。パークスさんは、バス・ボイコット運動の後には、キング牧師たちとしばしば行動を共にしましたが、しばらくしてデトロイトに移り、晩年はそこで青年たちを啓蒙する教育の仕事をしました。そうした長年の功績が認められ、晩年には国民が受ける最高の栄誉の一つである議会黄金勲章を受賞しています。しかし、そうした栄誉に浴したときでも、パークスさんは一貫して控えめで、物静かな女性でした。そのため、彼女が亡くなったとき、アメリカの各メディアはこぞって彼女の特集を組みましたが、ある新聞は、パークスさんは「静かな信仰」(quite faith)を持っていたと語り、その人柄と功績を称えました。そうした静かな信仰と控えめな態度の中から、あの「ノー」という言葉が発せられたのです。そして、それは、長い抑圧された生活の中においても、いつも神を見上げ、その神に信頼し、静かな落ち着いた信仰生活を送る中で養われたものであったのではないかと思います。そうしたパークスさんの信仰を思うとき、私は、いつも今日の聖書の言葉を思い起こすのです。そして、このみ言葉を読むとき、いつもパークスさんのことを思い起こすのです。

実は、パークスさんは、自伝を書いています、その各章の扉には、聖書の言葉が引用されていて、その中の一つが、今日のイザヤの言葉なのです。これは、だいぶ後になって発見したことなのですが、それを見つけた時、私は、今述べた私の核心は当たっていたと思いました。おそらく、パークスさんも、この聖書箇所を愛唱していたのではないかと思います。そして、そこに示されている静かな落ち着いた信仰に、いつも心を寄せていたのではないかと思います。そして、その静かな信仰を持って、あの「ノー」という言葉を語ったのではないかと思います。そして、わたしは、この静かな信仰が、わたしたちの生活においても大切ではないかと思うのです。もちろん、時には激しい信仰も必要だと思えます。戦う信仰も必要だと思えます。しかし、そうした信仰であっても、その根底には、この静かな信仰が必要なのではないのでしょうか。そうでなければ、激しい信仰は、時として自らを失い、脱線してしまう危険性があるからです。しかし、そうした信仰も、根底から静かな信仰によって支えられているならば、たとえ激しく揺れ動くとしても、時と共に、また健全な信仰に立ち返っていくことができるのではないかと思えるのです。そうした、信仰を支える信仰とも言えるような静かな信仰が必要なのではないのでしょうか。それは、ちょうど、海の底に横たわる深海のようなものではないかと思えます。深海は、海の上がどれほど荒れ狂っていても、微動だにもしないのです。そして、時が来れば、すべてを元の静けさに戻すのです。そうした揺るがない、静かな信仰

が、わたしたちの生活には必要なのではないでしょうか。

この静かな信仰ということを思うときに、もう一つ思い起こされることがあります。それは、画家のミレーが描いた「晩鐘」という絵です。皆さんもよくご存じだと思います。夕暮れ時に、一日の労働を終え、その大地の上で、農夫とその妻が、こうべを垂れて静かに祈っている絵です。一日の激しい労働を終え、一日を無事に過ごせたことに対する感謝と喜びを、静かに神に祈る姿は、わたしたちの信仰生活の原点と言ってもいいのではないのでしょうか。日が暮れ、一日の終わりを告げる教会の鐘がなり、それと共に一日の労働が終わるのです。それは、一日のきつい労働を支えてくれた神に対する感謝と喜びに満ちたひと時でもあります。そして、そのことを憶えて、静かに祈るのです。そこに、わたしたちの信仰生活の原点があります。そして、その祈りにおいて、穏やかな憩いの夜を過ごし、また新しい朝を希望を持って迎えていくことができるのです。そうした静かな信仰が、わたしたちの信仰生活全体を静かに支えてくれるのです。

わたしたちの人生には、時として、嵐が吹き荒れ、不安や苦悩が襲い掛かり、もうだめだと思うことすらあります。この度の新型コロナウイルスにしても、そうした類の一つであると言えます。また、1週間ほど前には、10年前の東日本大震災を思い起こさせるような激しい地震が起きました。そのため、いろいろな被害が出ています。災難に遭遇するたびに、わたしたちは打ちのめされ、生きる気力をそがれ、その場に立ち尽くしてしまいます。しかし、そうした災難も、終わることなく続くのではないのです。また日は昇ってくるのです。そして、その日を待つためにも、わたしたちには忍耐が必要なのです。そして、その忍耐は、何か激しい信仰というよりは、むしろ静かな信仰なのです。静かな信仰において、じっと耐える中であって、見えてくる希望があるのです。困難に遭遇した時には、特に、そうした静かな信仰が必要なのではないのでしょうか。しかし、これは、決して、静寂を最上の価値とするような静寂主義とは違います。あるいは、事なかれ主義でもありません。むしろ、激しい嵐を耐え忍び、それを乗り越えていく信仰です。そして、それは、日常の日々の生活の中で養われていかなければならない信仰でもあるのです。そうした、神に固く信頼する確固とした静かな信仰を、わたしたちは日々の生活において大切にしていきたいと思うのです。

最後に、もう一度今日の聖句を、口語訳聖書でお読みします。「あなたがたは立ち返って、落ち着いているならば救われ、穏やかにして信頼しているならば力を得る」。

お祈りいたします。